中長期的なICSのあり方に関する検討

作成：ICSPUメンバー 遠藤 匠真（大阪15）

背景

日本学生選手権スプリント競技部門（ICS）が初めて正式に開催された2015年から6年が経過した。この期間，事後修正を前提に見切り発車した懸念点や，開催回数を重ねることで判明した構造問題が顕在化しており，ICSの持続可能性は危機的な状況にある。加えてコロナ禍によって学連の人的/財務的基盤が揺らいでいる今，これまでのICSを見つめなおし，存廃の議論も含めて中長期的に持続可能なあり方を提示することは，当座の危機管理と同等に優先されるべき急務である。

しかしながら，この議論に不可欠なICSの当初理念や運営実務での問題点は現役学生にとって馴染みのない情報といえる。このため本件は，

- 過去の経緯に通じた理事会
- 今後のIC中長期開催計画を実働的に担うSPU
- 学生代表である幹事会

の3者の相互連携を基調としたい。

この前段階として，本件を幹事会の場でハンドリングできる粒度に落とし込む作業が必要であると考えており，幹事長を筆頭に少人数の有志で論点を整理されたい。本資料はその参考として提供するものである。スケジュールとしては**2021年度末の幹事会の場において議論に着手できること**を目標とする。

問題の構造

本件は，（コロナ禍を経て悪化した面はあるものの）基本的にコロナ禍以前より積み残されていた課題であることを最初に認識されたい。つまり，コロナ禍からの緊急避難的な暫定策ではなく，少なくとも10年後の学連の姿を念頭においたスキームを構築すべきである。この前提のもと，問題の構造は以下のように整理できる。

項目	内容
ICS開催形態の見直し	現在のICSの開催形態は近い将来に破綻する可能性が高いため，今後あるべきスキームを提示する。これは「今のICSを続けるためにどうするか」ではなく，「ICL，ICM，ICRも含めてIC全体を持続していくためにICSはどうあるべきか」という視点から検討されなければならないことに注意されたい。 現状の問題点/疑問点については理事会/SPUで整理したものを後述するので参考にされたい。
優良スプリントテレインの計画的保全	ICSの要求水準に耐えるスプリントテレインは極めて希少である。これをICSで無計画に消費し尽くすことはオリエンテーリング界の全体利益に反するうえ，年々ICS自体の開催難易度を悪化させることになる。 新規テレイン開拓の努力と並行してテレイン濫用を抑制するために，JOAとの連携や地区セレクションの見直しを含めた方策を検討する。
ICSガイドラインの改定	5年を目途に改定する前提で施行されたICSガイドラインについて，当初理念と現状とのギャップ，現状と将来像とのギャップを意識しながら内容を変更する。

これらの議題は個別に処理できるものではなく，総合的な解決策を示さねばならない。例えばICSのガイドライン改定は今後のICS開催形態が決まらなければ着手不可能であるし，ICS開催形態を考えるためにはテレイン保全策も検討する必要がある。

これを踏まえ，本件は以下のステップを踏むことが適切と考える。

1. 本資料を参考としつつ，**幹事長＋αの有志によって，「幹事会で議論する争点」を決定**する。

   幹事会の場で本件のような切り口の多すぎる議題，スキームをゼロから立ち上げるような議題を扱うのは難しく，仮に扱うとしても合宿形式が必要なほど時間を要する。すなわち，最初に幹事長＋αの有志によって本件の着地点の大枠を立ててしまい，そのうえで広く意見を求めたいこと，判断が必要なことのみを幹事会の議題とした方が円滑であるし，そのような前例も実際にある。なお，この過程で理事会/SPUの見解が追加で必要になった場合は連絡されたい。

2. **「幹事会で議論する争点」を理事会/SPUに報告**し，チェックを受ける。

   ここでのチェックは「幹事会で討議する題目が整理できているか」，「検討項目に抜け漏れがないか」という点に着目して行う。

3. **幹事会での議論と総会承認取得のスケジュールを策定**し，目標施行年度を決定する。

   議論が無為に長期化することを防ぐため「結局いつのICSから新スキームを適用するのか」を明確に言語化し，堅持すべき目標とする。これはSPUが担うIC中長期計画に直結するため重要である。

4. 幹事会での**議論に着手**する。

   繰り返しになるが本件の解決は急務であり，非常に優先度の高い議題であることを意識して議論されたい。必要であれば理事会/SPUからも幹事会に出席して確認や照会のリードタイムを削るべきである。

5. **最終的なアウトプット**（文書化された成果物）を提示し，**実業務での施行開始。**

   理事会/SPUとも方針を共有し，グランドデザインを着実に履行していく。

理事会/SPUとしての見解

2021年11月8日，理事会とSPUの間でミーティングの機会を設け，これまでのICSの振り返りや現状の課題整理を実施した。その内容を以下に整理する。

これまでのICSで顕在化した課題（末尾資料も参照）

ICSが導入されてからの6年間，秋ICがロングディスタンス競技部門のみであった時代と比較して

- 運営負荷が極端に上昇
- 運営者のモチベーション低下
- 大会企画の遅れが常態化

などの問題が顕在化している。昨今，運営者への日当増額が叫ばれるようになっているが，これはICの歴史の中でも前代未聞であり，本来は自らの喜び，先輩への恩返しのためにIC運営に従事していたのが今や苦役となりつつある証拠といえる。この現状について学連関係者は真摯に受け止め，速やかに是正していかなければならない。

現状に至る過程の考察

現在の窮状は，ICS導入から以下の過程を経て至ったものと推察される。

1. スプリントとロングという異質な競技を併催したことで，秋ICの**運営負荷が従前の2倍以上**となる。

   ICSが定着する以前，我が国のスプリントといえば「パークO」とほぼ同義であり，単に足の速い選手が勝つ種目，フォレストより一段下のものと見られていた。そうした文化の中でICSを単独開催したとしても興行面で大失敗に終わる可能性が高い。このため確実な集客力をもつイベント（=ICL）と併催する形態をとるよりほかなかった。しかしテレインや運営資材のほとんどを共有できるICM/ICRの関係とは異なり，ICS/ICLは会場すら別になることが普通である。すなわち，スケールメリットが生じないにも関わらず**IC1回分の人的リソースでICを2回運営させられる**構図になってしまった。特にICSは渉外業務や安全確保，競技上の膨大なチェック業務などでフォレスト種目以上の労力を要する大会であるから，秋ICの運営負荷は従前の2倍では済まない。個人的な経験からしても，達成感や満足感以上に無視できない疲弊感があったのが実態である。

   運営者を増やせば良いという見方もあるだろうが，そもそもIC運営の主要役員を担えるモチベーションやスキルをもったOB/OGの絶対数は多くなく，一度学生競技を引退した人間を強制的に招集する術はどこにもないことに注意されたい。

2. 運営負荷の増大により，**運営経験者のIC離れ**傾向が強まる。

   IC運営を楽しむことができれば運営者がリピーターとなって次回，次々回と継続して運営に参画することも期待できるが，上述の事情からそうなりにくい状況ができあがった。また，相当のスキルがなければ最低限の運営業務もこなせないというイメージが拡散し，運営初心者の参画障壁も上昇した。結果として責任感とスキルを有する少数の人材をヘビーローテーションする形になり，人的リソースの保全状況が劣悪なものとなった。

3. スプリント企画の困難さから，**大会企画立案/実行委員会発足が遅延**するようになる。

   上述のようにICSを開催する場合，適格テレインの探索，多数の走者が駆け回ることへの許認可取得，ICにふさわしい競技性の確保など多くのハードルがある。しかも，ICS導入によって学生が「パークO」では満足せず，それなりの質の「スプリント」を希求するようになった。これはスプリント文化の醸成としては狙い通りであったが，それゆえにむしろICSの開催障壁を高めるという負のフィードバックがかかっている。このようなハードルの中で大会の企画を早期に提示することは難しく，秋ICの運営組織発足もトコロテン式に遅れることとなる。

4. 実行委員会発足の遅れによって**準備期間が減少**し，ますます運営負荷が高まる。

   実行委員会の発足遅延によって運営負荷はさらに高まり，運営者の疲弊/モチベーション減退は加速した。また，本来「この夢のあるテレインでICSを開きたい」「競技面で新たな試みを導入したい」などといった前向きかつ主体的なトピックでモチベーションを向上するのが健全なIC運営であるはずだが，準備期間の減少によってそうした取り組みも困難になってきた。「すぐにICを開ける場所」が事前に用意され，そこに運営者があてがわれるというのが近年増えている構図である。

論点の整理

ICSの功罪

6年間にわたって学連の資源を惜しげなく投入しつづけたICSは，オリエンテーリング界に相応の影響を及ぼしてきた。以下は「ICS功罪マトリックス」である。

影響	導入からこれまで	将来
ポジティブ	・学生選手権者決定機能の創出 ・学生だけのスプリントの祭典の創出 ・本格スプリント文化の醸成 ・スプリント競技水準の向上 ・国際的プレゼンスの向上 ・競技/演出でのイノベーション促進	左に同じ
ネガティブ	・テレイン資源の大量消費 ・運営者からの「やりがい搾取」 ・秋IC収益性の不安定化 ・ICL開催計画の不安定化	左に加え ・持続可能なICの喪失

ICS導入当初の理念は，エキシビション競技としての本格的スプリントを普及させ，以て日本のオリエンテーリングが国際水準にキャッチアップする一助とすることである。この観点でICSは一定の成果を出しており，さらにICSが文化として定着した中で新たな価値も生み出してきた。一方で少なからずIC開催体制に歪をもたらし，IC全体の持続可能性を脅かすおそれすらある。

こうしたICSの功罪を捉えた上で新たなスキームを築くための切り口を2つ示しておく。

ポジティブな影響に優先度をつける切り口

ICS功罪マトリックスに示したポジティブな影響のうち，ICSでなければ実現できないこととは何か。仮にICS以外のイベントでICS同等の効果を得られるのであればICSを保守する動機はなく，開発を終了して代替サービスへの移行をサポートすべきである。

例えば，**# 学生スプリント選手権者の決定 # 日本のスプリント競技水準を国際レベルに** というタグのみを抽出するならば，それは全日本スプリントに学生部門を併設することで実現可能であるし，副次的にテレイン資源の消費ペースも抑制でき，大会のスケールメリットも向上する。特にJOAスプリント委員会によるテコ入れが図られている今であれば，俄然現実味ある話である。

本件がそう簡単でないのは，結局のところ **# 学生だけのスプリントの祭典** というタグが学生にとって最重要だからではないか，と理事会/SPUは考えている。一方でICでお祭り騒ぎができたのも2年前の話となっている今，OBと現役学生の間で価値観の溝が生まれている可能性も否定できないし，お祭りとしてのICSを諦めるチャンスなのかもしれない。

いずれにせよ，ICSが果たす役割のうち何が譲れないのか言語化して優先度をつけていただきたい。このとき学生の立場から青写真を描くのは大歓迎であるが，同時に自分自身が運営者となる可能性も意識して現実味ある将来像をイメージされたい。自分ができないことは他人にもできない。

ネガティブ影響をゼロにする切り口

検討の結果，ICSはあくまでICSとして保守するという結論に至るのであれば，IC全体が持続可能となるようにICSの機能をオミットするか，ICSのメジャーアップデートを行うしかない。

例えば，ICS功罪マトリックスに示したネガティブ影響のうち，多くはICSとICLを併催することに起因している。この併催は前述したように興行面が理由であるから，スプリント文化が根付いた今ならICS単独開催も夢ではないかもしれない。ただし，実際に併催が解消されたICS2020では参加者が315名。ICL2020の参加者数439名とは大きく差がついており，ICS単独での市場規模は未だフォレストに及ばないのではないかと思わせる不穏な結果である。

もちろんICS自体は多少の赤字（学連からの事業支出）を前提に導入されたものであって，度を越えた会計状況でなければ大きな問題はないのだが，ICSは本質的に高くつくイベントゆえ「度を越えた会計状況」は意外と容易に生じる。そして会計的なガバナンスの観点からも，ICSが垂れ流す赤字を無尽蔵に許容することはできない。

ICS単独開催を検討するにあたって理事会/SPUから提案したいのは，ICSの興行成績に数値目標を持たせることである。例えば，学連の財政的体力から許容できる支出上限を予め規定し，「3年連続で支出上限を超過したら翌年のICSは全日本スプリントに併設する」というような安全弁を設けておけば収拾のつかない赤字は回避できるし，市場拡大へのモチベーションにもなりうる。

ここまでICS単独開催について詳しく述べたが，あくまでもネガティブ要素を潰すことに主眼を置いてゼロベースで検討されたい。なお，独立大会としてのICSを維持する以上はテレイン資源保全が一層課題となるため，地区セレクションのあり方，SPUを窓口としたJOAとの連携など，テレインコントロールについても抜本的対策が求められることを書き添えておく。

【参考】時系列で見るICS運営面の課題

本稿は過去のICS報告書のうち，運営面での課題や提言を抽出したものである。事業者目線ではYMOEの山川氏がICS2020報告書のChapter7に詳細なレビューを投稿されているため，そちらも参照されたい。

2015：富士見高原リゾート

概要

- 運営母体フランチャイズ制を敷き，トータスが主体となって運営
- 初の公式なICSとしてICLと併催
- ICS/Lテレインを統合することで大会エリアを一体化
- 一般クラスはなく，出走間隔を極小化した選手権チャレンジクラスを設置

反省点

- 本来EAがS/L別であるべきところ兼任した

将来への提言

- 「渉外問題なく」「競技が成立する」ことを優先してテレインを選定すべき
- 一般来園客の安全確保のため，多数の役員を要した

2016：天平の丘公園

概要

- 運営母体フランチャイズ制を敷き，YMOEが主体となって運営
- ICS/Lのテレインが地理的に隔絶
- 会場移動の都合上ロングのモデルイベントが消滅
- 選手権チャレンジクラスを設置

反省点

- ICS/Lのテレインが遠い中で運営者負担の軽減を試みた結果，運営母体であったYMOEの負担が増大した
- 競技性を優先してICSテレインを遠隔地とした結果，モデルイベントの開催が不可能となり，会計圧迫につながった

将来への提言

- 併催を前提とする以上，運営工数の観点からICS/Lのテレインは可能な限り近接しているべき
- 併催を前提とする以上，モデルイベントの開催可能性は流動的であるため，参加費引き上げ等の収益対策が求められると考える

2017：時

概要

- 運営母体フランチャイズ制を敷き，岐阜県協会が主体となって運営
- ICS/Lのテレインが地理的に隔絶
- 大垣市上石津町での集落スプリントを実施
- 選手権チャレンジクラスを設置

反省点

- 地図作成の進捗状況管理に膨大な工数を要し，地図律速となる業務に大幅な遅延を生じた
- 地図作成業務と渉外業務が1名に集中しており，結果として大会直前期に渉外業務の未着手や対応遅れが発覚した
- 岐阜県の補助金や参加者数の上振れといった収入増要素があったものの，最終的には学連からの支出が発生した

将来への提言

- ICS/Lのテレインが相互に遠い場合，それぞれに運営責任者を設けることが望ましい
- ICSガイドラインと実情に既に齟齬が生じており，段階的な見直しが求められる
- 特にICSでは渉外上の理由から参加者数キャパシティに限度があるため，会計健全化/安定化に向けて参加費単価増額はある程度許容されるべき
- モデルイベントは増収効果大であり，今後も可能な限り開催されるべき
- 運営者モチベーション維持の観点から，日当の増額が望まれる
- ICS単独での収益力について調査し，単独開催可否について机上検討されるのが望ましい

2018：駒ヶ根公園家族旅行村

概要

- 運営母体フランチャイズ制を敷き，YMOEとOLCルーパーの協業で運営
- ICS/Lテレインを統合することで大会エリアを一体化
- 3日間開催とし，モデルイベントを開催しつつICS一般クラスを設置
- 競技エリア全域を観戦時に開放

反省点

- 純粋なフランチャイズ制としては応募者が現れず，YMOEの手持ちカード（地図資産/渉外基盤）を１枚切る形で開催せざるを得なかった

将来への提言

- 本大会で採用した3日間開催は，学生の夏季休暇期間での開催が前提とはなるものの，収支改善のために有効である

2019：中津川公園

概要

- ICS/Lのテレインが地理的に隔絶
- モデルイベントを断念し，ICS一般クラスを設置

反省点

- 前年に引き続きYMOEの手持ちカード（地図資産/渉外基盤）を１枚切る形で開催されており，初期渉外業務の実施後に運営組織が立ち上げられたため，実行委員会発足時点でテレインに選択の余地がなかった
- 役員選定が極端に遅延しており，十分な運営準備期間がなかった
- 2016年以降，秋/春ICのうち半数以上が中部・関西地区で開催されており，運営者が枯渇しかけた状態にあったことで業務負荷的に歪な人事配置となった
- YMOE渉外基盤に依存したことで実行委員会側は渉外業務から解放された一方，進捗管理が困難になった
- いわゆる「パークO」では競技者の要求水準を満たせない風潮の中，スプリント競技への適格性に欠けるテレインで高度なコースを設定したことが背景要因となり，調査依頼および提訴が発生した

将来への提言

- 運営組織立ち上げおよびEA選任の遅延は準備期間減少に直結するため，少なくとも1年前の時点で役員の目途が立つよう，学連側において主体的かつ適切にコントロールされるべき
- ICSの競技パートの業務負荷は年々増大しており，その人事配置と業務分担については前例にとらわれることなく柔軟に最適化されるべき
- IC開催地が特定の地区に偏ることは，人的資源の観点で持続可能性に欠けるため，ICが開催可能な土壌を各地で形成する必要がある
- IC実施規則/ICSガイドラインの実情との乖離が年々進んでいるため，早急な改定が望まれる

2020：那須野が原公園

概要

- 当初予定されていたICSが渉外上の理由で中止となり，代替大会として開催
- 地区予選を実施する時間がなく，予選/決勝方式を採用
- 短納期かつ人員不足が見込まれたため，学連での合意形成の上で学生運営者を組み込んだ

将来への提言

- 運営者を全員学生とすることは現実的に不可能
- 演出費用は競技性向上に直接寄与しない一方で会計上の負担が大きい。演出費用を参加費のみで支弁するのではなく，補助金の活用等の見直しが求められる
- ICの継続性を優先する場合，新規テレインや大幅リメイクを要するテレイン以外でのIC実施が会計上有効である
- この代替大会においても開催上のコア領域はYMOEが掌握しており，YMOEがICSから完全撤退することを前提に構造変革を行う必要がある
- スプリント競技への適格性を有するテレイン資産は有限であり，全日本大会をはじめとする大規模大会での利活用も視野に入れて保全されるべき。特に新規テレインでの地区予選開催の必要性は要検討

観点の整理

2022 年

日本学生オリエンテーリング連盟

Next インカレ 2024-25 プロジェクトを進める上での議論のポイントを以下のとおり、整理。

1　課題の整理

日本学連・ICSPU の議論を通じて ICS の継続開催について以下の課題を認識。

「別紙 1_中長期的な ICS のあり方に関する検討」に記載のあるとおり、「これまでの ICS を見つめなおし，存廃の議論も含めて中長期的に持続可能なあり方を提示することは，当座の危機管理と同等に優先されるべき**急務**である。」

1. ロング×スプリントの組み合わせにより運用制約が強く、運営負荷が高い
   - スプリントとロングという異なる性質の競技を 2 日間にわたり運営するため、異なる運営ノウハウや資材が求められる。
   - ロングテレインの近辺にスプリントテレインを設定する必要があり候補数が少ない、かつ競技性が高くないテレインを選定する必要がある。
   - 上記制約のため、テレイン選定が進まず実行委員会の立ち上がりが遅くなっている。
2. スプリントの渉外難易度が高く、インカレ参加者数に耐えられるテレインがない
   - インカレ参加者数(700 名程度)に耐えられるスプリントテレインは数少ない。
   - また、上述の理由によりさらに少ない候補の中から選定する必要があり渉外難易度が高い。
   - 地区セレクションにより、インカレ開催のポテンションのテレインを消化してしまっている。

2　代替案の検討

課題に対し検討を行った結果、以下の代替案が考案された。

I.　現状維持

現状どおり秋はスプリント種目・ロング種目、春はミドル・リレー種目を開催する。

II.　ICSR/ICMLR の開催方式

秋はスプリント種目・スプリントリレー種目、春はミドル・ロング・リレー種目を開催する。

III. ICS の全日本スプリント併催

スプリント種目を全日本スプリントに併催し、秋はロング種目、春はミドル・リレー種目を開催する。

IV. ICS/ICL/ICMR の開催

スプリント種目とロング種目を別開催とし、春はミドル・リレー種目を開催する。

3　代替案の評価

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
運営負荷	× ➢ スプリントとロングという異なる性質の競技を運営するため、負荷が高い。	△ ➢ 性質の異なる競技を運営するという課題を解決することができるが、フォレスト 3 種目を運営する負荷が高い。	○ ➢ 全日本スプリントに移管するため、学連側は運営負荷が少ない。	× ➢ 年に 3 回実行委員会を立ち上げる必要があり、現状を鑑みると現実的ではない。
渉外難易度	× ➢ ロングテレイン近辺でテレインを見つける必要があるためテレインの制約が大きく、難易度が高い	○ ➢ ロングとスプリントの分離によりテレインの候補が増えるため、難易度が下がる。	○ ➢ 全日本スプリントに移管するため、学連側は負荷なし。	△ ➢ ロングとスプリントの分離によりテレインの候補が増えるが、渉外先が 3 か所になり負担が増加する。
スプリント競技の発達	× ➢ スプリント競技に適していないテレインであっても無理やり大会を成立させる必要がある。	○ ➢ スプリントに適したテレインで競技を開催することができ、スプリントリレーを開催することができる。	△ ➢ 大学生にとってのスプリントの大きな大会が、全日本大会のみとなってしまう。	○ ➢ スプリントに適したテレインで競技を開催することができる。
学生のための選手権大会	○ ➢ 学生をメインとした大会が開催される。	○ ➢ 学生をメインとした大会が開催される。	× ➢ 学生以外の競技者がメインとなった大会が開催される。	○ ➢ 学生をメインとした大会が開催される。
学連のお金	△	○	?	×

	➢ 現状維持。	➢ 1 テレイン分の作成費用を削減し、学生に還元することができず。	➢ 全日本大会と相談の上決定。	➢ 実行委員会を 3 回立ち上げるため、その分の経費がかかることが予想される。
選手への金銭的負担	△ ➢ 現状維持。	△ ➢ 春インカレの参加費および宿泊費が 1 泊分増加となる。	○ ➢ 秋インカレの宿泊費が不要となる。	× ➢ 3 回分の参加費および宿泊・移動費を支払う必要がある。
選手の身体への負荷	△ ➢ スプリントとロングという異なるトレーニングが求められる競技を同時タイミングでピーキングする必要がある。	× ➢ 春に 3 種目をこなす必要があり、体力的な負担が大きい。	○ ➢ スプリント、ロングを別日に実施することでピーキングを簡単にすることができる。	○ ➢ スプリント、ロングを別日に実施することでピーキングを簡単にすることができる。
総合評価				

4　Ⅱを実施した場合の変更内容とその影響の整理

#	項目	非影響者	メリット	デメリット
1	秋 1 テレイン・春 1 テレインとする	学連	□ 1 テレイン分の作成費用を削減することができ、浮いた費用を赤字補填や参加費減に回すことができる。	□ 春テレインのエリアが広くなるため、適したテレインを見つけることが難しい。
2	競技	選手	□ 秋はスプリント、春はフォレスト種目とすることでピーキングをしやすくなる。 □ 質のいいテレインでの競技を通じて競技力の向上を促すことができる。	□ 春インカレがミドル・ロング・リレーの 3 日間となり、学生への身体的負荷が増加する。

			□ 世界ではスプリント種目の重要度が高まっており、スプリントリレーを学生に日本全体の競技力の向上につなげることができる。	□ 負担増加に伴い、新入生や競技力が高くない選手の満足度やモチベーションが下がる可能性がある。
3	テレイン制約	実行委員会	□ スプリントとロングを別開催とすることで、ロングテレイン近辺でならなければならないという、スプリントのテレイン制約を解消することができる。	□ 春にはミドル・ロング・リレーを実施することができる広大なテレインが必要である。(ロング相当)
4	オリエンテーリング界のスケジュールが変わる	競技会全体	□ 秋にインカレ・全日本が開催されピーキングが難しかった部分が改善される。	□ 従来の大会とのスケジュール見直しが必要である。 □ 学生大会の開催時期の調整が必要である。
5	運営負荷	実行委員会	□ スプリントとロングを別開催とすることで、ロングテレイン近辺でならなければならないという、スプリントのテレイン制約を解消することができる。	□ 社会人の繁忙期である３月に３日間大会を開催するため、運営準備が大変である。 □ OBOG はこの形式でのインカレを経験していないため、運営者招集が困難となる可能性
6	参加費	選手	□ 1 テレイン分の作成費用を削減することができ、その分を参加費減に繋げることができる。	□ 春インカレを 3 種目とすることで、参加費が上がる可能性がある。
7	渉外負担	実行委員会	□ ロングテレイン近辺という、スプリントテレインの制約がなくなるため、候補を増やすことができる。 □ フォレストの渉外先を一本化することができ、渉外負担が減る。	□ スプリントについては、同一テレインを利用する場合２日間占有する必要があり、渉外負荷が高まる。 □ フォレストについても、広大なエリアを渉外する必要がある。

8	参加者数	選手	□ 近年のスプリント競技の盛り上がりにより、ICSRに今までと同等、それ以上の参加者を見込むことができる。	□ フォレスト競技の 3 日間開催により、参加者数が減少する可能性がある。

学連版権地図を団体が全面改訂する場合の規定
2020 年度幹事会で話し合ったことを改めて成文化（今般 2 件の申請があったのを機に）

2022.8.28　学連版権地図指定管理業者　YMOE 山川

0.この規定は日本学連版権地図を、傘下団体（地区学連、加盟校を想定、以下団体）が全面改訂をして競技会を開催する場合に適用する。（話し合いは 2020 年度幹事会）

1.この規定の適用期間は、日本学連の版権地図の指定管理業者が幹事会に報告した時点から当該大会が終了するまでとする。（幹事会報告か幹事会決議（ネット決議 ok）のどちらにするか？そういえばドリームリレーの時も報告だけで進行させていたような）

2.この適用期間の間、団体への学連地図の版権代の支払いを免除する。

3,大会開催後の当該大会主催団体への特典はない。また、元の日本学連地図の管理運用方法に戻る。（特にここ 2020 年度幹事会で入念に話し合った部分）

4.10 万円程度以下の地図修正費で済む場合は本規約を適用せず、通常の学連地図規約の元、当該イベント予算で支弁する。（今までのセレクションとか）

5,それより少額のものについては、定期である学連地図現場判断地図修正予算（現状 30 万円）を適用

6.当該大会のコース外において、今後の練習会合宿において修正しないと支障があると思われる場合は 2.と 5.の規定を併用してもよいものとする。但し、明確な判断基準を幹事会に報告する義務を負う。（説明＝例えば今回の関東新人戦で使用しない範囲＝通常の練習会でも相当長いコース以外はめったに行かない範囲で、ちょっとやそっとじゃ修正不可能な大規模林道造成が発見された。ここは今回の新人戦の修正範囲とはせず、5 の規定の地図修正予算の中で優先順位をつけて、のちにプロに依頼予定）

今までの適用例と今回申請の合計 4 つ
1.2020 年度.KOLC 大会、矢板日新、コロナで後に Dream リレー、
2.2021 年度、名梢大会、望郷の森、コロナで後に山川 Dream、但しこのテレインは学連の利用権で正確には岐阜県協会の版権、また本年 7/31 をもって将来のビッグ大会開催のためにクローズテレインとした。
【2022 年度今回適用申請報告】
3.関東学連新人戦、日光例幣使街道、9/7 開催
4.KOLC 大会、矢板山苗代、12/ 4 開催

議論の背景説明

昨今はすでにテレイン飽和状態にあり、新規テレイン開発となるとかなりチャレンジャブルである。その中で例えば KOLC の筏場、東大 OLK の足尾勝雲山など挑戦的なテレイン開発の成功例もみられるが、毎年うまくいくわけではない。最初のドリームリレーも挑戦的テレイン開発の断念から、大会運営だけはクラブの存続のために、短工期ですむ学連既存テレインの修正しがいのある場所を紹介してほしいで始まった。翌年、名栂も望郷の森使用で同じコンセプトで申し出があった。（そもそも静岡大や名栂が、富士山麓テレインや WOC2005 のあと財産である三河高原の一連のテレインを使用する場合に地元県協会と版権関係の取り決めを話し合うとの状況は同じで、学連版権テレインも今後このようなシーンで再利用することが多くなってくると思われる。）

2 年前は修正し甲斐があり、当該年度の予定とも支障がないテレインとして「矢板日新」を推薦した。今回は 2 団体から申請があり（KOLC はまたしても野望テレインを山梨県で断念）通常の練習会利用で大きな変化がみられる場所を紹介。（実はこれ 3 か所で、もう 1 か所が「毘沙門山」、５．の昨年度報告が遅れているが、練習会使用団体からもっと造成林道道は多数あると報告が入り、プロが 4 日かかってやっと大規模造成林道とその周りの植生変化を修正した。その後練習会希望の団体がなく、ならばセレ利用が一番良いと指定管理業者は判断した。
「日光例幣使街道」を最近使ったクラブからは経年変化が多く残念な地図という声が多く聞こえるようになってきました。ここは一番の最適新歓テレインであるだけにこの精度のままではまずいと判断。台風で崩れたところ以外はコンタを直す必要はなく、主に植生変化と特徴物がそこにあるかが調査対象
「矢板山苗代」は 2 年前に伊藤樹氏に修正依頼をしてミドルセレを行った場所ではあるが最近の練習会でここも大規模林道造成が入っている（修正なしで練習会は挙行）し植生の変化も激しいと報告されている。
それで、これらの修正作業は、プロに 1 日３万円払って直すよりも学生の手で皆で刺激会しあいながら調査の実地経験を積む方が将来の育成的にもよいのではないかというのがまず一点（短工期で一通りの経験が積める）、私もイカ地図を 400 円で売り続けるのは良心の呵責があり、学連も修正した地図で運用した方が勿論良いに決まっている。イカ地図に 250 円版権料を乗せるよりこの制度を利用した方が、学連にとっても安く教育的効果も大きく地図が新しく更新される。つまりとても良い制度ということで三方両得になる。今後新規地図作成事業より適用例が増えていくと思われる。
あとは実情を一番知る指定管理業者と提案する団体との相談になるが、大元の幹事会に対して情報が開かれている必要がある。これを報告とするか幹事会決議とするかは 2 年前も曖昧のまま進めてしまったが、いったんここで立ち止まって話し合う機会としたい。（とはいってももう大会が 9/7 に迫り、どちらの団体もハウス利用ですでに調査合宿を行っている状況）